

住宅を新築したい施主が考えておくべきことについての走り書き

綾瀬市 N (おおつ住宅工房顧客)

2005.07.30.

■ 基本的なこと

住宅については、気候風土と伝統を重んじ、町並みと風景を考えに入れる。子供の情操に対して住まいの持つ甚大な影響力を恐れよ。自分の人生観、価値観、家族観をしっかりと自覚し、自分に対して、勇気を持って正直になること。見栄を張ったり背伸びしたり、他人の考えや言うこと、営業宣伝に惑わされたりしないこと。人為より、自然。

■ 施主とプロの分業

施主は素人であるから、プロである建築士や職人を尊敬し信頼すべき事。プロの感性、見識、技能を発揮していただき、できれば施主もそれを盗む事。こうして、施主は職人や建築士にお金を払っているのを忘れず、そのお金を大切に活かすことを考えよ。プロの領域で施主の知識がプロにかなう訳は無いのだから、プロの領域がどの範囲かをよく考え、その部分では余計な口出しなどを慎むべき事。そういう部分でもし施主の意見に沿って仕事を進めてしまうと、ものの分からない子供が大人の言うことを聞かずに欲望のままに突っ走り、痛い目に遭うような結果を見るだろう。(これはほかならぬ私自身の家作りの経験から思い知った事です。性分でどうしても技術的な細かいことまで自分で考えて納得しないと気が済まないところがあるため、ここはこうしたほうがいいんじゃないかというような提案を、住宅展示場のセールスマンから聞きかじったような生半可な知識からしてみたことが何度もありましたが、私の家作りのパートナーである大津さんは、私の話にはよく耳を傾け理解しつつも、現実の家作りは間違った方向に進まないように導いて下さいました。) 反対に、施主が考え、決めなければ進まないことについては、施主はよく勉強し、考え、早期に明確に建築士に伝えること。これだけでも大変な仕事なので、施主はプロが百も承知しているような素材的な又は技術的な無駄な勉強などせぬこと。

ほんの一例に過ぎないが、ある施主が家庭において夫婦の語らいを何よりも大切にしているのか、それとも子供の勉強の方が家庭の機能として優先すると考えているのか(その答えいかんでは間取り図に重大な影響を及ぼすが)、これはいくら建築士といえども施主自身に聞かなければ知りようが無い。しかし木造家屋の耐久性と断熱性とローインシャルコストを同時に図るにはどのような工法が適するかなどという問題では、施主がいくら考えても、建築士が出すよ

りも妥当な答が得られるわけは無いから、そんな問題については一切建築士に任せてしまった方が良い。これに類した例はほかにもいくつも挙げる事ができる。そこでいまひとつだけ例を挙げると、住まいが暖かいほうが良いか寒いほうが良いかということも、施主の考え次第であって、建築士や、工務店の社長が一概に決め付けて良い問題ではない。

暖かい家の良さは今説明するまでも無くみんな知っていることなので書かない。

寒い家の良さを考えてみると、寒いということはおそらく気密性が低いため、特に湿度の高い気候下では建物の耐久性の点で有利である。虫など微生物の攻撃に対しても有利と想像される。住まいが寒いので冬など外出したときのショックが少なく、外出のストレスを知らない。冷暖房をまじめにするのも効率が悪く無駄なので衣服で寒暖の調節をすることが習慣となってしまう、かえって光熱費が節約される。その結果エゴ的であるのは当然。老人にとっては厳しい環境なので、意地悪なお姑さんの早死にで嫁と家族全員の幸せが期待できるかと思ったら、反対にお姑さんは逆境に体を鍛えられ用心もするようになって、長寿を全うしてしまった。まして同じ環境が育ち盛りの子供たちの体の鍛錬にどう影響するかは読者の想像に任せたい。米寿の舅が子供のときにどういう住まいに住んでいたかも考えてみてもらいたい。

住む人の寿命についてすら、意見は分かれ得る。単に生物として生きている時間が長くさえあればそれが良い事なのか。それとも「こんな生なら早い死の方がまし」という場合は無いのか。寝たきり老人となった私の早い死は、私の下の面倒を見る長男のお嫁さんにとってだけではなく、私自身にとっても幸福な事ではないのか。しかし、いや、やっぱりどんな状態でも一秒でもとにかく長生きしたいという人もいよう。

これは笑い話ではない。人がどのような生を、死を、いつ獲得するか、それがその人の一生の幸不幸にどう関係するかは切実な問題である。

つまりこのように、暖かい住まいを作るか寒い住まいを作るかという問題ですら、施主の人生観次第であって、建築士や工務店の社長の一概に決め付けて良いこととはやはり言えないのである。

『いい家は無垢の木と漆喰で建てる』の中で神崎社長は、施主のおばあさんの特別の依頼で、断熱材の無い家を建てたという例を報告している。

さて施主が以上のようなことをよくよく考えた上で、ひとたび「自分たちは暖かい家に住みたい」と決まったら、それからはもうプロの出番であって、プロは与えられた条件の中で施主の望む人生のために最善を尽くしてくれるだろう。

建築家の故宮脇檀氏は、厳しい言葉だが、次のように言っている。

「施主が巷にあふれる住宅関係情報誌で得た一片の知識でもって、その部分の専門家になったと思いついてしまったら、建築家が相手の生活のすべてを理解したと錯覚したときと同様、悲劇の始まりである。他のすべての人間関係同様に、かかわり合うことにはむずかしい領域がある。いったいどこまでが自分のかかわりあうべき部分であり、どこまでがかかわりあってはな

らない部分かの見きわめができない人は、他人に自分の家を発注してはならないだろうと思う。」

■ 施主が取り入れるべき情報

施主が勉強する場合、良い教科書によって勉強する事。いかがわしい情報源にだまされない事。情報の中に潜むコマーシャルをよく嗅ぎ分ける事。たとえば雑誌や単行本を読んだとして、その雑誌などを発行するお金の出所がどこか、雑誌の記事は誰にとって有利な内容なのかも頭に置きながら、自分にとって有益で間違いがないと思われる情報だけを抽出して、自分の栄養として摂り入れること。

■ 施主が必ず考えておかねばならないこと

そのための前提条件としても、「基本的なこと」で述べたように自分の価値観をはっきりと自覚することは、是非とも必要となる。この自覚は、そもそも自分はどんな設計者に家作りを託すべきかを判断するための基準としても、欠かせない。他人の考えはその人自身のための物であって、その人にとってはプラスになることも、あなたにとっては逆にマイナスになることもあるということはごく普通にある。だから、「それで、自分の場合はどうか？」ということに常に真剣に深く省みなければならない。

■ 施主が読むべき本

とはいえ、「そんなこと、よく分からないよ」という人もいると思う。私の場合、有名な建築家のエッセイを読むことは、そのようなことを考えるヒントとして非常に役立った。本当は自分は何が好きなのか。本当は自分はどんな暮らしを望んでいるのか。自分たち家族はどんな道を進むべきなのか。本当に趣味の良いデザインとはどんななのか。家作りを一所懸命進める中で、建築家の書いた文章を読む中で、あなたは初めて本当の自分に気づく経験をするかもしれない。

たとえば吉田桂二、渡辺武信、宮脇檀、天野彰、みんな素人の読者を想定しており、みんな安定した大家であり、誰に遠慮もお世辞も要らないので、本当の事を書いている。素人の施主が自分の住宅の設計についてヒントとすることができる斬新なアイデアが容易にどっさり見つかる。「本当に新築すべきなのか、増改築でいいのではないか。またはそんなにお金があるなら田舎へ行って畑付きの広い広い借家に住んだほうがあなたにはいいのではないか」といったことまで言ってくれる人もいる。ムリしてお客のご機嫌を取って自分のところに呼び寄せる必要などない人たちがばかりだから、大きい自由な視野から本当の事が発言できるわけだ。小さい書店へ行っても、きれいなカラー写真とメーカーの自社の製品や住宅商品の宣伝にしか

出くわさないかも知れない。こういう本は大きめの書店の、建築関係の売り場へ向かったほうが手っ取り早く手に入ると思う。

そういうわけで施主の読むべき本は、営業熱心な住宅と建築関連の会社や売出し中の建築家などが寄り合って作った新建材のコマーシャルを満載した雑誌ではなく、高名な建築家が長い実務経験と高い見識をもって素人の読者を想定して書いた、コマーシャルのヒモがくっついていない、エッセイなのである。

■ 背水の陣

あなたは貧乏であるほど成功するだろう。家を建てるためのお金は、貧乏な私にとっては大変な金額だった。だからこそ最大の効果をあげようと最善を尽くす。これは貧乏性である。しかしそれが結局は新居での暮らしを幸福に導くと信じている。

お金に余裕のある人は、私ほど必死にはならないだろうと思う。「失敗したらまたよそに土地を買って、そこにまた新しい家を建てて引っ越せばいいや」と考えるだろう。これに対し私のような貧乏人は後が無い。背水の陣であるから、必死にがんばって、結局は家作りという戦いに勝ってしまうのだ。

以上、まとまりが付きませんが、住宅を新築したい施主の持つべき心得を、自分の経験から述べました。